

秋田市大森山動物園情報誌

コミュニケーション

communication
No. **110**
2025.10月号

目次

- P 2～3 園長あいさつ／こんにちは!あかちゃん/
移動動物／訃報／飼育動物数
- P 4～5 【特集】トナカイに“トナカイらしい暮らし”を
—放牧飼育の歩みと継承—
- P 6～7 飼育レポート／動物病院から
- P 8～9 イベントレポートトピックス
- P 10～11 イベントレポート
- P 12 飼育日誌、お客さまの声、かたばた通信



あきぎん 大モリンの森

ちょうどいいから
住みやすい! 秋田市
LIFE
市民と広げるまちへの誇りと愛着

ワオキツネザルの親子

園長あいさつ

就任のごあいさつ

園長 本間 弘生

このたび、大森山動物園の園長を拝命いたしました、本間弘生と申します。

長年にわたり当園を支えてくださった小松守名誉園長にあらためて感謝申し上げるとともに、温かく迎えてくださった関係者の皆さまに、心よりお礼を申し上げます。

さて、大森山動物園は、千秋公園にあった児童動物園の時代を含めると70年を超える歴史を持ち、秋田市民のみならず、秋田県内、隣県の皆さまにまで広く親しまれている、貴重な地域資源のひとつです。多くの来園者の皆さまの笑顔と、動物たちのいきいきとした姿が共にあるこの場所で、園長という重責を担うことをたいへん光栄に思っております。

一方で、近年の動物園運営・経営を取り巻く環境は、少子高齢化や人口減少の進展などもあり、たいへん厳しいものがありますが、これまで取り組んできた命の尊さや環境の大切さなどを伝える場としての役割はもとより、娯楽・レクリエーション施設としての機能も果たしながら、教育、種の保存、研究、動物福祉といった現代の動物園に求められる多面的な使命も



果たすべく、職員や関係企業、ご支援いただいている皆さまと力を合わせ、持続可能な動物園づくりに取り組んでまいります。

これからも、大森山動物園が、子どもたちにとっては「命(動物)との出会いの場」として、大人にとっては「癒しと学びの場」であり続けられるよう、より開かれた、地域に根ざした動物園を目指してまいりますと考えております。

今後とも変わらぬご理解とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

こんにちは! あかちゃん

ゼニタナゴ

2025年初夏に16尾の稚魚が二枚貝から浮出しました。2年連続で10尾以上が生まれています。ゼニタナゴは、秋に二枚貝の中に卵を産み付け、仔魚で冬を越す変わった習性があります。二枚貝の安定した飼育や、貝への産卵率を上げるなどの課題はありますが、飼育下での繁殖が軌道に乗りつつあります。



2025年1月以降に大森山動物園で生まれた赤ちゃんをご紹介します。

ニホンリス

2025年5月11日に出産を確認しました。お母さんの由利子は初めての出産で、4頭の子どもが生まれました。

6ページの飼育レポートも併せてご覧ください。



このほか、ワオキツネザル、プレーリードッグ、モルモット、ヨーロッパフラミンゴにも赤ちゃんが生まれています。みんな、元気に育ってね。

飼育動物数(6月末時点)

哺乳類	鳥類	爬虫類	両生類	魚類	無脊椎動物	合計
46種 315点	24種 121点	13種 24点	3種 8点	3種 27点	1種 23点	90種 518点

よろしくね!

仲間入りした動物たち

レイファ レッサーパンダ 令花♀

2025年4月14日に福井県にある鯖江市西山動物園から、ひなたのお嫁さんとしてやってきました。くりくりの目と短めの足がチャームポイントです。今後は2026年の繁殖シーズンに向けて準備を進めていきます。ひなたとの間で2世の誕生に期待がかかります。



スバルバルライチョウ あっ君♂ コッシー♂

2025年4月23日に東京の上野動物園から新幹線に乗って2羽のオスがやって来ました。高温に弱いため、近縁の絶滅危惧種であるニホンライチョウを参考にした温度管理で、慎重に輸送しました。到着後は良好な採食が確認され、ホッとしました。



このほか、シバシコウのオスとメス1羽ずつが5月28日に札幌市円山動物園から、メスのニジギジが5月30日に姫路市立動物園から、チリーフラミンゴのオスとメス1羽ずつが日立市かみね動物園からそれぞれやって来ました。また、北海道の施設から、当園では初めての展示となるカーペットニシキヘビが6月23日に来園しました。

元気でね!

大森山動物園を後にした動物たち

カナダヤマアラシ サシコ♀

2025年3月4日に生まれ故郷である浜松市動物園へ旅立ちました。浜松市動物園に新しいオスが導入されたことから、繁殖のために里帰りしたものです。繁殖がうまくいくことを願っています。



ノドジロオマキザル 颯♂

2025年6月24日に北海道の施設へ移動しました。やんちゃな個体で、当園の群れの中で孤立してしまったため、動物病院で生活していました。新しい環境でも元気ですね。

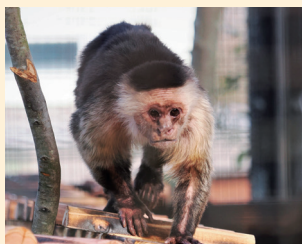


訃報 忘れないよ…



ノドジロオマキザル チャールズ♂

2025年2月13日に亡くなりました。イギリス生まれのチャールズは、1993年に来園し、ナナエ(メス)との間に10頭以上の子どもをもうけたビッグダディでした。愛妻のナナエに先立たれましたが、晩年はかわいいおじいちゃん、穏やかに暮らしていました。



ボアコンストリクター シア♂

2025年4月18日に亡くなりました。2010年に札幌市円山動物園から来園しました。当園のヘビが在来種だけだった当時は、貴重な海外の種類の個体でした。新しいサル舎に引っ越してからは、よくプールに浸かっているところが見られました。



トナカイ ルミ♀

2025年5月25日に亡くなりました。ルミは2020年に那須どうぶつ王国から来園しました。ふれあいフェスティバルの動物パレードや雪の動物園のおさんぽタイムなどのイベントでも活躍したトナカイです。妊娠が分かり、出産を期待していましたが、難産の末、母子ともに亡くなりました。とても残念です。



アビシニアコロブス がっこ 雅香♂、いぶり 燐♂

2025年6月1日に雅香、翌2日に燐が亡くなりました。雅香は2019年、燐は2021年に、サル舎の新築工事に伴う仮住まいの動物病院で生まれた兄弟です。とても仲がよく、新しくできたサル舎では外の展示場でダイナミックに動き回る姿が印象的でした。



雅香(左)、燐(右)

このほか、ニホンザル、インドクジャク、シバヤギ、コモンマーモセット、プレーリードッグ、ワオキツネザル、ニホンリス、ファンボルトペンギン、モルモット、アカカンガルー、ブロンズキが亡くなりました。



1

2013年～2020年

飼育管理方法の見直しから始まったトナカイの放牧飼育

飼育展示担当 主席主査 柴田 典弘

大森山動物園では、2013年からトナカイの飼育管理方法を見直す取り組みを進めてきました。

まず、トナカイ飼育の課題であった歯の摩耗対策として、ルーサン(アルファルファ)を多めに与え、葉の部分のみを選んで採食させる管理へと切り替えました。これに加え、樹葉を用いた給餌や、自由採食を目的とした園内散歩(リード装着)も始めました。これらの試みにより、痩せていた個体の状態が改善するなど、展示舎外でのケアの有効性が確認されました。



自由採食を目的とした園内散歩

また、暑熱対策として、冷凍ペットボトルやスプリンクラー、濡れタオルを用いた気化熱冷却を試みました。それでも体温が上昇する個体が多いため、原因を調査したところ、「サシバエの吸血による走り回り行動」が大きく関与していることが分かりました。この行動が十分な休息を妨げ、体温上昇を助長していたのです。

サシバエ対策としては、2014年から虫よけスプレーの使用を開始しました。高い効果は確認されたものの、持続時間が短いため、より根本的な改善策として、トナカイの野生環境に目を向けました。トナカイは水とともに生きる動物です。そこで、トナカイを園内の塩曳潟に放牧し、自発的な遊泳によってサシバエを避けるという発想に至りました。

初めてトナカイを連れて塩曳潟に出向いたのは2014年10月でした。オスのルドルフには水を怖がる様子が一切なく、リードをつけてはいたものの、水の中に平気で入っていくことが確認されました。翌2015年にはメスのサクラを塩曳潟に連れて行ったのですが、リードを外した直後に遊泳し始め、非常に驚かされました。後に、サクラの行動調査をしたところ、まだサシバエ対策が解決していなかった展示舎では15分程度だった休息が、放牧場では最大2時間30分まで延びる等の劇的な変化も見られ、放牧による効果は想像以上でした。それから、最長4か月間の連続

放牧にも成功し、こうした取り組みが評価され、2019年にはエンリッチメント大賞をいただくことができました。

こうした試行錯誤の一方で、2018年、サシバエによる行動の変化について共同研究していた岩手大学から、牛用の外部寄生虫駆除剤がサシバエに対しても高い効果を持つという情報が寄せられました。この駆除剤の使用により忌避効果は平均4日間続くようになり、走り回る行動も消失し、放牧に依存せずに管理できる環境が整いました。

この頃、展示舎と放牧場の管理を1人の担当者が行うことの厳しさを踏まえ、この手法を次世代に継承すべきかどうか葛藤していました。放牧という「完成された結果」を継続させることも大切ですが、それだけでは作業の大変さだけが際立ってしまいます。一番大切なことは、展示舎内でトナカイを健康に飼育する技術であり、その経験から導かれた手段の一つが放牧でしたが、2020年のシーズン終了をもって一旦中止する決断をしました。



2014年から開始した塩曳潟での遊泳



牛用の外部寄生虫駆除剤の使用



2

2022年～

技術と想いを継承。5年ぶりに放牧飼育を再開

飼育展示担当(動物専門員) 黒石 涼太

私は2022年からトナカイの担当となりましたが、実はその時からトナカイを放牧してみたいと考えていました。痩せている個体や高齢の個体もいたため、体調管理の観点からも、自由に採食できる環境が必要だと感じていたからです。また、なにより放牧され、のびのびと過ごす姿こそがトナカイらしいと強く思っていたからです。とはいえ、いざ放牧を実現しようと考え、準備や日々の管理の大変さ、危機管理まで含めた課題の多さなどが脳裏に浮かび、自分に放牧飼育ができるのかと不安でした。同じ担当の柴田主席主査からも「簡単なことではない」と聞いていたので、なかなか言い出せずにいました。

そんな中、担当になって4年目となる今年の班ミーティングで、意を決して「トナカイの放牧をしてみたい」と切り出しました。すると、「班全体で協力するからトライしてみてもいい」と周囲から背中を押してもらうことができ、不安は消え、一気に前向きな気持ちへと変わりました。

柴田主席主査と現状や課題を再確認しつつ、周りのスタッフからのサポートも得ながら準備を進め、1か月で放牧場を整備しました。そして、2025年7月8日、5年ぶりにトナカイの放牧を再開しました。水に入って泳ぐ姿や、クワ等の枝葉を夢中で食べる様子を目の当たりにして、本当にやってよかったと心から思いました。この日、柴田主席主査から「技術だけでなく、思いまで継承できた

ことが何よりうれしい」と言われました。

放牧飼育への挑戦は、トナカイにとってより良い環境を考える日々の試行錯誤を積み重ねた先にあったものの一つです。これからも動物たちのためにできることを考え、前に進んでいきたいと思っています。



5年ぶりのトナカイの放牧・遊泳(2025年7月)



トナカイ放牧場の整備



飼育

Breeding report

レポート



Breeding report

1

ニホンリス由利子の繁殖

飼育展示担当 主査
鈴木 昌典

2025年5月、6年ぶりにニホンリスが繁殖しました。出産したのは、2024年11月に仲間入りした由利子です。

由利子は食欲旺盛、活発な女の子で、同居を始めた当初は、仲間を追いかけていました。

ところが、繁殖期に入ると、オスに追いかけられたり、巣箱にこもることが増えたりと、行動に変化が見られるようになりました。

少しずつ由利子のお腹が大きくなり、普段は目立たない乳頭も出てきたため妊娠を確信。落ち着いて子育てができるように巣箱を増やしたところ、日中は巣箱に入り、夕方頃に餌を頬張るようになりました。

子育てはすべて由利子に任せ、飼育員は巣箱をのぞくことも

しないと決めていました。しかし、鳴き声や動く音が聞こえないが巣箱に耳を当てるなど、担当としては落ち着かない日々が続き、巣箱を開けて中をのぞいてしまいました。

すると、巣箱の中で2頭の赤ちゃんが元気に動いており一安心。無事に育つようお願い、再び巣箱を閉じました。

数日後、巣箱から4頭の赤ちゃんが出てきました。一生懸命に育ててくれた由利子に感謝しつつ、次は展示場整備に取りかかりました。

リスは汗をかかないため、体温調整が難しい動物です。出産後の由利子と子どもたちが暑さをしのげるよう、展示場内に直射日光を遮るための植樹と、凍ったペットボトルの設置を行いました。

出産後は少し痩せていた由利子の体も元に戻りつつあり、4頭の子どもは元気いっぱい展示場の中を動き回っています。



お母さんの由利子



すくすく育っている4頭の子どもたち



Breeding report

2

ワオキツネザルのジャングルジム

飼育展示担当
越後屋 真優

野生のワオキツネザルは樹上で生活しており、木から木へジャンプして移動します。体重が軽く、手足の構造から助走なしで3m以上ジャンプできるほど高い運動能力を持っています。しかし、寒さに弱いため、動物園ではワオキツネザルを冬期間に外に出してあげることができません。これでは、運動不足による肥満やストレスに繋がってしまいます。

そこで、暖かい季節にはより活発に運動できるよう、屋外展示場にジャングルジムをイメージした遊具を設置しました。設置後、ワオキツネザルたちは、4mほどの高さでも軽々とジャンプし、たくさん運動するようになりました。春に生まれた仔もようやく親から離れ、大人のまねをしてピョンピョン動いている姿はかわいらしく、とても癒やされます。

高い遊具の上では、ジャンプして運動するだけでなく、ひなたぼっこをしてくつろぐ姿も見ることができます。

ワオキツネザルは体温調節が苦手なサルで、日が出ているときはお腹を太陽に向けて座り、体温を維持します。以前は地面で行っていることがほとんどでしたが、最近では遊具の上でもこの行動が見られるようになりました。

ワオキツネザル一歩の特徴は尾ですが、地上を歩くときには上にピンと立て、樹上にいるときは下にだらんと垂らします。ジャングルジムで運動する姿はもちろん、このような尾の違いなどもぜひ皆さんに見ていただきたいと思います。



ジャングルジムで遊ぶワオキツネザル



ひなたぼっこする
ワオキツネザル



地上では尾をピンと立てる



樹上では尾を下に垂らす

Breeding report

3 祝20歳! ツキノワグマのルビー

飼育展示担当(動物専門員)

堀籠 麻子

ツキノワグマのルビー(メス)が20歳を迎えました!

ルビーは、2005年1月22日に北秋田市のくまぐま園で生まれ、2010年に大森山動物園に来園しました。

私は2025年5月からルビーの担当となりましたが、まだ経験が浅いため、前任者から聞いた冬ごもり明けの体型にまつわる話を紹介します。

クマは冬になると餌が採れなくなるので、消費エネルギーを節約するために活動を制限する冬ごもりをします。これに備えて秋にたくさん食べてむっちり体型になりますが、春になると痩せた状態で目覚めます。そのため前任者は、目覚めたルビーが痩せてお腹を空かせているだろうと思い、木の実や野菜などをたくさん用意していたのですが、冬ごもり明けのルビーは秋と変わらない

むっちり体型のままでした。秋にしっかりと蓄えて、春まで体重が維持されているのは、冬ごもり前後の体重管理としては成功ですが、このまま夏まで太った状態だと夏バテしてしまう恐れがあるため、春からは、ルビーのダイエットを開始しました。

愛嬌のあるルビーの誘惑に負けておやつをあげてしまうなど、ダイエットは困難を極めました。時に心を鬼にして食事のコントロールを続けてきたことで、ルビーは健康に20歳を迎えることができました。

私も、前任者たちの努力を受け継ぎ、信頼関係を築きながら、ルビーが楽しく健やかに過ごせるようサポートしていきたいと思っています。



20歳を迎えたツキノワグマ・ルビー



愛嬌のあるルビーは飼育員を誘惑



冬ごもり明けのルビー

動物病院から カンガルーの治療について



飼育展示担当(獣医師)

佐々木 優

2025年8月現在、大森山動物園では2か所の展示場で計12頭のアカカンガルーを飼育しています。エサやり体験が可能なか、展示場の一部が来園者に開放されており、空間を共有して間近に観察することができます。

そんな(基本的には)平和的・友好的なカンガルーたちを苦しめているのが、俗に「カンガルー病」と称される「カンガルー類の進行性歯周病」です。この病気にかかると、歯の周囲や口腔内に炎症および感染症が発生し、病変が周囲の組織や頭部の骨の中にまで進行することで、様々な合併症を引き起こします。この時、しばしば顔の腫れを伴うことから、この病気は英語圏では「lumpy jaw(こぶ顎)」と俗称されます。罹患には、飼料や環境、感染菌種、口腔内の外傷等、様々な要因が挙げられていますが、飼育下のカンガルーにおいて、最も高い罹患率、死亡率を有しているにも関わらず、決定的な病因や治療法が判明していません。裏を返せば、多因子の総合作用により成立するとも考えられます。これらの要素をなるべく排除し、発症時には対症療法と

経過観察、必要であれば麻酔下の処置を行うことが、目下の対策となっています。今後も、カンガルーたちの愛くるしい表情を守るよう、日々飼育環境を整え、経過を注視していきたいと考えています。



エサやり体験可能なふれあいコーナー



カンガルー病で腫れた顎

Event report 1 モルモットの ロングカクカク橋渡り

飼育展示担当(動物専門員) 佐藤 有紀乃



雪の動物園で初開催したロングカクカク橋渡り



大森山動物園オリジナルの直角コース

モルモットの「ロングカクカク橋渡り」は、飼育員が製作した専用の橋をコースとして、モルモットたちが行進する様子を間近で観察し、モルモットがどんな動物なのか、楽しく学べるイベントです。この橋は、従来のまっすぐな「ストレートコース」に、カクカクした「直角コース」を付け足したのですが、直角コースを渡るモルモットが見られる動物園は大変珍しいと思います。

このモルモットの「ロングカクカク橋渡り」は、2025年2月に開催した「雪の動物園」の特別イベントとして初めて行いました。

イベントに向けて、約2か月前から橋の製作に取りかかりました。まずは、作りたい橋の長さ合う木の板や棒を集めることから始めました。新しい木材を購入するだけでなく、節約のために園内の至る所から木材を探し出し、毎日の飼育作業の合間にコツコツと橋の製作を進めました。おかげで、橋本体は1か月もかからずに完成しました。

しかし、橋の本体が完成しても終わりではありません。本体を支える脚を作る必要もあります。全部で10脚をXの形にして作るのですが、このXの角度をすべての脚でそろえないと橋がまっすぐにかからないため、ずれが生じないように繊細な作業が求められました。私1人では絶対にできない作業でしたが、先輩スタッフの協力やアドバイスを受けながら、なんとか橋全体を完成させることができました。

橋の完成後は、本番に向けて橋渡りの練習を繰り返しました。当初はなかなか列が繋がらず、全頭完走することが難しかったのですが、地道に練習を繰り返すうちに、全頭がスムーズに橋を渡れるようになりました。

そして迎えたイベント当日。モルモットたちは少し緊張気味で、コースの途中で渋滞を起こすこともありましたが、たくさんのお客さんの応援を受けて全頭無事に橋を渡りきってくれました。

普段はふれあい動物として人気のあるモルモットですが、集団行動の習性や学習能力があること、嗅覚を生かして橋を渡ることなど、「ロングカクカク橋渡り」を通じて、モルモットの魅力をもっとたくさんの人に伝えていきたいと思っています。



飼育員同士の協力によって
完成したコース



練習で列がつながるようになった
モルモット



緊張のイベントスタート



お客さんに応援されて無事に完走

ニホンイヌワシと森林の 生物多様性を守る取組について



ニホンイヌワシの概要

飼育展示担当(獣医師)副参事 小川 裕子

ニホンイヌワシは、森林生態系における食物連鎖の頂点に位置する大型猛禽類です。現在、国内に生息するニホンイヌワシは約500羽と推定されていますが、生息環境の悪化による生息分布域の縮小、つがい数の減少や繁殖成功率の低下等により、ここ30年ほどで急激に減少しています。

絶滅危惧種を守るための取組としては、自然の生息地そのものを保全する生息域内保全と、動物園などの安全な施設に保護し、繁殖などにより個体数を増やす生息域外保全があります。ニホンイヌワシについて、国では生息域内保全として、生息状況の把握やモニタリング、生息環境である森林の維持や改善等の取り組みを行っており、大森山動物園では、生息域外保全として、イヌワシの命をつなぎ、飼育技術と繁殖技術を高め、展示により来園者の方へ野生イヌワシの現状を伝えています。

東北森林管理局との コラボイベント

飼育展示担当(動物専門員) 宮原 星

2025年6月1日に開催した「春の動物ふれあいフェスティバル」で、生息域内でイヌワシの保全に関わっている林野庁東北森林管理局の森の専門家とのコラボにより、イヌワシについて理解を深め、私達の生活の中で森の保全に繋がる行動を考えるイベントを実施しました。

このコラボイベントは、講演会、クイズ大会、パネル展の3つの内容で構成されていました。

まず、講演会では、小松守名誉園長からイヌワシ飼育の歴史や生態等についてお話いただきました。また、東北森林管理局の岡崎仁美生態系保全係主任主事からは、森林の機能やイヌワシが狩りをしやすい森にするためには人間が森を活用する(木材を活用する)ことも重要であることや、イヌワシがいる森は森林生態系が保たれていることなどについてお話いただきました。



小松守名誉園長と東北森林管理局による講話

次に、クイズ大会「イヌワシと森のモリモリクイズ」では、森林の役割や管理、イヌワシを中心とした森の生き物について○×形式のクイズを行いました。問題の作成は森林管理局の岡崎主任主事と私で手分けして行いましたが、私自身も知らないことが多く、とても勉強になりました。なかなかの難易度に、大会では参加者も苦戦するかと思いきや、正解率は想像以上に高く、接戦となりました。



イヌワシと森のモリモリクイズ



パネル展「イヌワシが眺める森」

また、パネル展「イヌワシが眺める森」では、森と生き物の関わりをテーマとしたパネルを新たに共同制作し、園内に展示しました。パネルには、木登りが得意なアオダイショウや、糞で種をまくツキノワグマやニホンザルなど、生き物と森が互いに欠かせない関係であることが分かりやすく説明されていました。

大森山動物園ではこれまで、さまざまな形で環境教育に関するイベントを行ってきましたが、今回、森林管理局という森の専門家に協力していただくことで、より充実した内容をお客様にお届けできたと思います。また、私自身も新たな知識を得ることができましたので、それらを今後の大森山自然塾や自然観察会などに活かしていきたいと思っています。

イベント



通常開園スタート (3月15日)

穂積前市長のほか、ネーミングライツ・パートナーの秋田銀行様にもご出席いただき、開園セレモニーを行いました。セレモニー後、来園者を動物たちがお出迎えしました。



開園セレモニー



動物たちがお出迎え

飼育の日イベント (4月19日、20日)

4月19日の飼育の日になんだイベントで、今年は2日間の開催でした。飼育員の作業服を着ての記念撮影や、約30kgの乾草の運搬体験のほか、作業車両の展示や普段は見ることのできない動物園の裏側見学まで盛りだくさんのイベントでした。



作業服を着て記念撮影



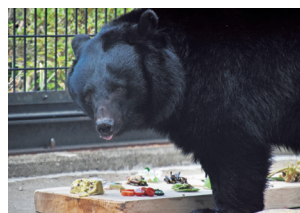
作業車両の展示

ゴールデンウィーク特別イベント (4月26日～5月6日)

毎年県内外から多くのお客さまが来園くださるゴールデンウィーク。期間中の土日祝日には日替わりで特別イベントを開催。今年はコツメカワウソのエサやり体験やツキノワグマの特別まんまタイムなどを行いました。



コツメカワウソのエサやり体験



ツキノワグマの特別まんまタイム
～ルビーちゃん和秋田の山菜パーティー～

飼料作物スダックスの共同栽培 (5月20日～7月1日)

浜田小学校と栗田支援学校の3年生24名が参加し、ゾウさん堆肥を使ったスダックスの栽培から収穫までの作業を5月から7月にかけて実施しました。

刈り取ったスダックスはゾウ舎へ運び、アフリカゾウの花子にプレゼント。生徒たちは、ゾウのフンから作った堆肥でスダックスが育ち、それをまたゾウが食べるという自然の循環を体験的に学ぶことができました。



スダックスの収穫作業



スダックスを花子にプレゼント

春の動物ふれあいフェスティバル (6月1日)

動物たちが園路を行進する「どうぶつパレード」を開催し、パレード終了後は動物たちとの記念撮影を楽しみました。9ページに記載した、東北森林管理局とのコラボイベントも開催しました。



動物パレード



動物たちとの記念撮影

第48回 親と子のふれあい写生大会 (7月12日～8月3日)

今年は、園内や自宅で制作した作品277点の提出がありました。秋田市造形教育研究会による審査で31点が入賞し、上位入賞者には8月31日の表彰式で賞状と副賞を贈呈しました。市長賞など上位3賞へ贈呈されたオモリントロフィーは、新屋ガラス工房の協力により制作されたものです。



秋田市長賞
秋田市立川尻小学校2年 棟方 里津
「ザラザラアナちゃん」



秋田市議会議長賞
秋田大学教育文化学部
附属中学校2年 野口 桜
「金色の瞳に問いかけて」



秋田市教育長賞
秋田市立土崎中学校2年 鈴木 結翔
「母の温もりに包まれて」

3園館連携事業による出前授業 (7月17日)

男鹿市立美里小学校で、男鹿水族館GAO、鶴岡市立加茂水族館とともに出前授業を実施しました。アカコンゴウインコのメレブやモルモットなどのふれあい、骨格標本解説や麻酔用吹き矢体験などを通して、動物について楽しく理解を深めてもらいました。

※3園館連携事業＝東北の日本海に面した地域にある動物展示施設が連携し、各園館の利用促進と地域活性化のためにイベント等を相互に協力して取り組むこととしています。



間近で見る動物に興味津々



動物の骨格標本解説

第51回 サマースクール (7月30日、31日)

7月30日には小学校3年生以下を対象に、31日には4年生以上を対象に行い、計37人が参加しました。参加した子どもたちは、飼育体験やクイズ、ゲームなど通して動物の体の特徴や飼育員の仕事について学びました。



ファンボルトペンギンに
エサをあげました



キリンのお部屋をキレイに掃除

夜の動物園

(8月10日～15日 ※13日を除く)

今年も、真夏の夜にライトアップされた園内で特別なイベントを行いました。特に、「スイカタイム」は大人気でした。期間を通して天候にも恵まれ、1万5千人を超えるお客さまにご来園いただきました。



カピバラのスイカタイム



ビーバーのどうぶつ解説



今後のイベント

(予定)

●11月30日(日)

「さよなら感謝祭」 ※通常開園最終日
2026年

●1月4日(日)～2月28日(土)の土日祝日
「雪の動物園」

飼育日誌

Breeding diary

1/2	フクロテナガザル	交尾あり。
1/3	スパールバライチョウ	発情により餌への執着低下。時期がずれている。
1/13	ニホンイヌワシ	第1ペア(たつ子♀×千秋♂) 1日を通して複数回の交尾時の鳴き声、録画記録で二度背に乗る行動を確認。
1/16	ベニコンゴウインコ	巣箱内で3卵を確認。
1/18	アカカンガルー	みかん♀の仔デコボン BRペレットを採食している。
	ノドジロオマキザル	太一♂が日向み、チャールズ♂、カオル♀に集中攻撃される。
1/20	フタコブラクダ	幸♀ 朝の放飼時、右脚がガクガクしていてなかなか歩き始めない。
1/21	アムールトラ	カサンドラ♀ 発情兆候強まっている様子あり。
	モルモット	橋渡し練習。
1/22	ユキヒョウ	リヒト♂×アサヒ♀同居、マウント、交尾行動ともに複数回確認。
1/23	マーコール	グルミ♀がゆべし♀に真横から突進されて横転。ケガなく経過観察。
1/24	キリン	リンリン♀ 両前肢削蹄。
1/26	ポニー	セレナ♀ 両前肢蹄叉腐爛の疑い。
1/27	アメリカビーバー	チャト♀ 麻醉下顎切歯切除作業。
1/29	マーコール	グルミ♀ 入院。
1/31	ニホンイヌワシ	第2ペア(紫雲♀×西目♀) 2個の卵を孵卵器へ入れる。
2/2	ミーアキャット	一時的に4頭同居状態となるが全頭怪我無し。
2/4	シマフクロウ	ココロ♀からアオハ♀へ餌の受け渡し確認。
	アムールトラ	カサンドラ♀ トレーニング台で伏臥姿勢練習実施。
2/9	ホッキョクオオカミ	ニッキー♀の陰部が赤い。
	ニホンリス	何度か発情の鳴き声を聞く。
	フタコブラクダ	福♂ 今日発情からなかなか部屋に入らない。
2/10	プレーリードッグ	寝室繁殖準備。
	ベニコンゴウインコ	巣箱内卵を全回収(計6個)、内1個は雛の形までの発生を確認。
2/17	マーコール	みつめ♀ 右角が根元から完全に折れる。
	プレーリードッグ	フォート♂×ムーン♀ 頻繁にマウントしていた。
2/21	ホッキョクオオカミ	ムーン♂ ターゲットトレーニング実施。
2/27	ニホンイヌワシ	西目♀ 第2フラッチの2卵目産卵していた(確認日)回収、第1ペアに卵移入、たつ子卵回収。
	シマフクロウ	アオハ♀ 巣内にいる様子確認、20時55分頃産卵。
2/28	アカカンガルー	デコボン 屋外へ初放飼。かなり興奮気味でフェンスに体当たりをしていた。
3/5	ツキノワグマ	冬ごもり終了。
3/8	ボアコンストリクター	シア♂ 脱皮不全のため温浴実施。
3/10	マーコール	グルミ♀ 退院し展示場に移動。

3/11	ニホンイヌワシ	西目♀ 破卵につき抱卵終了。
3/24	ニホンイヌワシ	(西目♀卵2卵)天王寺動物園へ搬出。
3/26	カピバラ	4頭群 湯っこ実施時、強風などによりパニックに陥る。
3/27	プレーリードッグ	ホープ♀ 不正咬合のため歯切り実施。
3/28	ユキヒョウ	アサヒ♀ 産箱に巣投入。
3/30	ホオアカトキ	右緑♀ フラフラと立てずに座りこむ。
4/2	プレーリードッグ	ポン♀の仔4頭確認。
4/4	トナカイ	雨瑠♀ 左落角、落角完了。
4/5	フクロウ	マイ♀ 巣箱内の卵が5個になっていた。
4/9	ユキヒョウ	アサヒ♀ 腹部少し重みがあるように見える。
4/12	ユキヒョウ	アサヒ♀ 寝室目隠し用暗幕設置。
4/15	シマフクロウ	破卵。
4/16	ユキヒョウ	アサヒ♀ 出産に備え本日から室内飼育とする。
4/19	ユキヒョウ	リヒト♂ 採血トレーニング実施。(血液採取に成功)
4/20	レッサーパンダ	令花♀ 展示訓練開始。(ガラス展示場)
	ニホンリス	由利子♀ 少し乳房が目立ってきた気がする。
4/22	カリフォルニアアシカ	マヤ♀ 左口角の炎症広がる。
4/24	アムールトラ	カサンドラ♀ 産箱内への巣入れ。
4/25	アフリカゾウ	疝痛、投薬。
4/28	ニホンリス	由利子♀ 腹部膨満消失、出産した可能性あり。
5/1	トナカイ	ルミ♀ 乳房の張りを確認。5月12日以降の出産予定。
5/6	プレーリードッグ	ポン♀の仔1頭開眼。
5/9	ラマ	おはぎ♀ 移動練習中、チンパンジーコタロウに驚き、走り出し、両後肢の爪がめくれ上がり、出血。
5/12	キョン	ノゾム♂ 左牙脱落。
	ヒツジ	毛刈り。
5/16	ユキヒョウ	アサヒ♀ 前日に岐阜大学から連絡あり。妊娠していないと判定。
5/19	ユキヒョウ	アサヒ♀ 展示再開。(収容はできず)
5/24	トナカイ	ルミ♀ 帝王切開手術。
5/27	ゼニタナゴ	FRP保全池で浮出確認。
6/3	グリーンイグアナ	イグリン 左後肢第V指の爪が根元から取れて多量に出血。
6/15	カナダヤマアラシ	メープル♀ 暑さ対策のため病院へ移動。
6/18		越冬舎漏れにトナカイ放牧用ネット設置。
6/20	ライオン	トモ♀ 来園者から指摘された腹側頸部の皮膚たるみは、触診にて皮下脂肪と皮下水腫の可能性大。硬結感はなく脂肪腫の可能性はあるが、乳腺腫のような硬結感のある腫瘍ではないと判断。経過観察。
6/22	ラマ	おはぎ♀×ヒロ♂ 同居するも交尾に至らず。
6/23	アカコンゴウインコ	メレブ♀ 総排泄腔付近の羽が抜け、やや膨らみも見られ目立っている。産卵近い?
	ポリビザリスザル	マロン♂ 交尾行動。
6/29	ミーアキャット	粉末真竹の敷材を展示場に入れたところ、感覚エンリッチメントの効果を期待できるものだった。

お客さまの声

- 3/19 アメリカビーバーの人气が高くなっていると思います。まんまタイムやグッズなど沢山出しているのを期待しています。
- 4/9 年パスで何度も利用させてもらっている。来るたびに違った発見や楽しみが見つけられて、親子共々楽しく過ごさせてもらっています。
- 5/4 とても満足度の高い動物園でした。家族が増える前に最後の夫婦2人旅の良い締めになりました。
- 6/8 母と子2人を連れてきました。何回も訪れているので安心感があり、過ごしやすかったです。
- 6/26 とても心が癒やされました。可愛いは正義!
- 7/12 ケンシンおたすけ隊に参加しました。レッサーパンダの食事の一部になるようなイベントに参加できて嬉しいです!こういったイベントを今後も増やして欲しいです。
- 7/2 来園2回目、前回冬でしたが夏はまた見え方がちがって楽しめました。



かたばた通信

当園に異動して今年で11年目。総務担当は、予算経理や労務管理などのほか、入園券販売業務も行っていますが、長年課題となっていたのが混雑時の来園者対応です。

ゴールデンウィークなどの繁忙期は、入園券購入のため長時間お待ちいただくこともありましたが、今年の4月から事前購入が可能な電子チケットの販売を開始しました。並ばずに入園できる電子チケットで、園内での時間をゆっくり楽しんでください。(田森)

発行/秋田市大森山動物園

〒010-1654 秋田市浜田字湯端154番地 TEL:018-828-5508 FAX:018-828-5509
E-mail:ro-inzo@city.akita.lg.jp デザイン・印刷/株式会社アートシステム

◎動物取扱業者/秋田市長 沼谷 純 ◎事業所及び所在地/秋田市大森山動物園 秋田市浜田字湯端154番地
◎登録に係る動物取扱業の種別/販売:動-19-52 貸出し:動-19-53 展示:動-19-54
◎登録の年月日/2007年6月1日 ◎有効期限の末日/2027年7月31日 ◎動物取扱責任者/高橋 広志、山上 昇

大森山動物園

検索

www.city.akita.lg.jp/zoo/index.html

